

一 般 質 問 通 告 書

令和 8 年 8 月 2 7 日

高島市議会議長 河越 安実治 様

高島市議会議員 1 4 番 是永 宙

次の事項について質問いたしたいので通告します。

※質問項目（番号）が 2 以上ある場合は、次のどちらかに○をつけてください。

- ・ 質問番号 1 の用紙にだけご記入ください。
- ・ 質問が一つだけの場合は必然的に 1 となりますので、記入は不要です。

初問は { 1. 全項目一括質問一括答弁
②. 項目ごとに一括質問一括答弁

(質問番号 2)	通学先にかかわらず高校生が地域で学び、チャレンジできる仕組みづくりについて
発 言 事 項	
要 旨	(項目だけでなく、質問の趣旨が理解できるように記入してください。)
近年、全国各地で「高校魅力化」の取組が広がっています。高校と地域が連携し、地域をフィールドとした探究学習や地域活動を進めることは、高校生の学びを豊かにするとともに、地域への愛着や将来的なリターン、地域の担い手育成にもつながる重要な取組であると考えます。一方で、「高校魅力化」は基本的には高校を単位とした取組です。その高校に通う生徒には様々な地域との関わりや学びの機会が生まれる一方、その高校に通っていない高校生には、その機会が届きにくいという課題があります。高島市では、市内に暮らす高校生の約 4 割が市外の高校へ通学しています。高校生は、どこの高校に通っていても、高島市で暮らす市民であり、高島を創っていく若者たちです。高校生の地域での学びや育ちは、通学する高校によって左右されるのではなく、高島市に暮らす全ての高校生に開かれたものであることが望ましいと考えます。 昨年、私は「社会教育を核とした若者参画・定着のまちづくり」について一般質問を行いました。その際、市からは、「高校生が地域と関わる環境が十分に整っていないこと	

を課題として認識しており、高校生がどのようなことに関心を持ち、どのような関わり方であれば無理なく参加できるのかを把握しながら、段階的に仕組みづくりを進めていく」との答弁がありました。また、図書館を高校生にとってのプラットフォームとして、そこから地域との緩やかなつながりをつくっていくことや、市長部局と教育委員会が連携し、高校生や若者が地域と関わる仕組みを検討していくとの方向性も示されました。そこで今回は、前回答弁をさらに一歩具体化し、通学する高校にかかわらず、高島市に暮らす高校生が、それぞれの生活や関心に応じて地域と関わり、地域の中で学び、チャレンジできる仕組みづくりについて質問します。

問１ 通学先にかかわらない「高校生の地域での学び」について

高校生になると生活の中心は高校となり、特に市外高校へ通学する生徒については、中学校卒業を境に、市や地域との接点が少なくなる傾向があります。しかし、高校生の時期に、学校とは異なる地域社会の中で様々な世代の人と出会い、地域の仕事や文化、自然、地域課題などに触れ、自ら考え行動する経験を持つことは、本人の成長だけでなく、地域への愛着や、将来的に地域と関わり続けることにもつながると考えます。

高島市においても、市内高校の地域連携や魅力化を後押しすることと併せて、「高島市に暮らす高校生」という視点に立ち、市外高校へ通う生徒も含めた全ての高校生に、地域と関わり、様々な経験や学びを得られる機会を提供することを、社会教育や若者政策の一つとして位置づける必要があると考えますが、市の見解を問います。

問２ 「関わり方を選べる地域参加」と高校生主体の活動について

高校生は、学業や部活動、アルバイト、進学準備などで忙しく、地域活動への継続的な参加が難しいという実態があります。そこで、年間を通じた継続参加を前提とするのではなく、１回だけ、数時間だけ、友人と一緒に、あるいは自分の興味のあるテーマだけといった、「関わり方を選べる地域参加」をつくるのが有効ではないでしょうか。例

えば、福祉、環境、農業、観光、防災、文化、子育てなど様々な分野で、地域団体、NPO、企業、行政などが高校生に経験してほしい活動を小さな地域体験プログラムとして用意し、高校生が自分の興味や都合に応じて選べる仕組みが考えられます。また、行政や地域が用意した活動への参加を求めるだけではなく、高校生自身の「好き」「得意」「やってみたい」を出発点とすることも重要です。高校生を地域活動の単なる「参加者」や「お手伝いをする人」としてではなく、自ら考え、企画し、実践する主体として位置づけることが、高校生自身の成長にもつながると考えます。

高島市においても、高校生が自分の生活に応じて関わり方を選ぶことができ、地域の小さな実践につなげることのできる仕組みを構築することについて、市の見解を問います。

問3 高校生・高校と地域をつなぐコーディネーターの配置について

高校生が「地域でこんなことをやってみたい」と思っても、誰に相談すればよいのか、どのような団体や企業とつながれば実現できるのか分からないことがあります。一方、地域団体や企業にも、高校生と一緒に活動したいという思いがあっても、学校や高校生との接点をつくるのが難しいのが現状です。

また、市内高校の先生からは「地域との関係づくりに苦勞している」「学校と地域のつなぎ役（コーディネーター）が必要」といった声も聞いています。探究学習や地域連携の重要性が高まる一方、教員が日常の学校業務を担いながら、協力してもらえる地域の人材や事業所等を開拓し、継続的な関係を築いていくことには限界があります。

そこで、高校生一人ひとりを地域での活動につなげたり、高校や地域からの相談に応じて相互の連携を支援するコーディネーターを配置してはどうでしょうか。配置することで、通学先にかかわらず全ての高校生に地域での学びや活動をサポートすることと、市内高校の地域連携を進めることの双方を、共通のコーディネート機能によって支えることができると考えます。

全国には、市町村が自ら予算を確保し、こうしたコーディネーターを配置している事例があります。地域おこし協力隊の制度や国や県の財政支援を活用することはもちろんですが、高校生の地域での育ちや参画を支えることは、県立高校への支援にとどまらず、高島市自身の社会教育、定住政策、地域づくりにも関わる取組です。高校生・高校と地域をつなぐコーディネーターの配置を検討すべきと考えますが、市の見解を問います。

問４ 全庁横断的な高校生の地域参画の仕組みについて

高校生が地域で学び、経験するテーマは、教育分野だけではなく。福祉、環境、ごみ減量、防災、農林水産業、商工観光分野など、行政の様々な分野が高校生にとっての学びのフィールドになり得ます。

前回の一般質問でも、実際に市内では、Work Life Story EXPOをはじめ、高校生によるシニア向けスマホ教室、福祉事業所での職場体験など、各部局や地域で高校生と地域をつなぐ取組が行われていることが分かりました。しかし、こうした取組がそれぞれの部局や学校、団体ごとの個別の取組にとどまっていたら、高校生に十分な情報が届かず、市外高校へ通う高校生が参加することも難しくなります。また、「教育委員会だけでなく市長部局としても、高校生や若者との関わりや仕組みづくりについて議論し、官民共創で進めるまちづくりへの高校生の参画や体験について検討する」との市長答弁もありました。

前回答弁で示された図書館の「高校生のプラットフォーム」というアイデアも活かしながら、教育委員会と市長部局が連携し、高校生地域参画の仕組みを構築してはどうか、市の見解を問います。